

森本利通、一年半振り三度目のステップスギャラリー個展である。森本はグループ展にはほとんど出品しないので、常に個展は大切な時間となる。

森本は描くスタイルを変えない。今回もこれまで通り、水に沈めたアクリルの上澄みを何十回も重ねて塗ることによって生まれるマチエールに、透明な球が漂う。

2016年12月に横浜・ギャルリーパリで発表し始めたスクエアの作品も今回、登場した。連作になっているようで、並べて展示しても独立して一枚としてもいい作品である。果てしなく薄いグラデーションが繊細で美しい。今回の新しい展開は、これまで横であった画面を縦にした作品である。それでも森本の水平と垂直に変化はない。



森本の作品は時代を超える。この作品群が1960年代としても、中世としても、もしかしたら古代としても通用するのではなかろうか。それどころか森本の作品が未来に登場しても、何の不思議も感じないくらい自然の感触がある。SF映画の地球であっても宇宙船の中でも、森本の作品が飾られていても違和感がない。何かか。



森本の作品を見ると、透明な球が具体ではなく、もっと精神的というか霊的というべきか、子宮とか胎児ではなく、魂の在り処を感じるのである。魂は環境がなければ誕生できない。その環境も整っている状態が、森本の作品の中で成立しているのではないだろうか。太陽が膨張して地球を飲み込む前に、人間は環境破壊によって自滅するであろう。そうであっても、人間が滅びる日が訪れようとしても、その日までに、森本の作品は在り続ける。つまり、森本の作品とは人間そのものなのである。人間が人間である限り、魂と環境は永続する。すると、人間は美術を捨てることがない。どれほど文明が発達し、AIの時代に突入したとしても、人間は絵を描き続けるし、絵を必要とする。森本の作品を見て、そう私は確信した。

